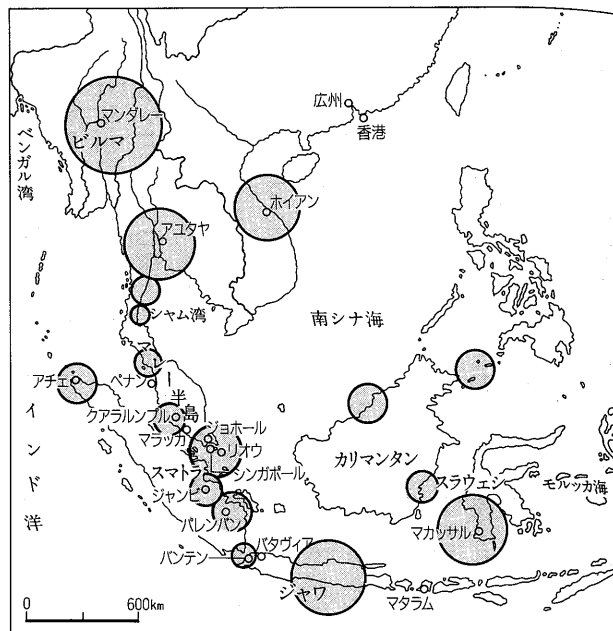




東南アジア世界、「海のまんだら」と「陸のまんだら」(モデル)

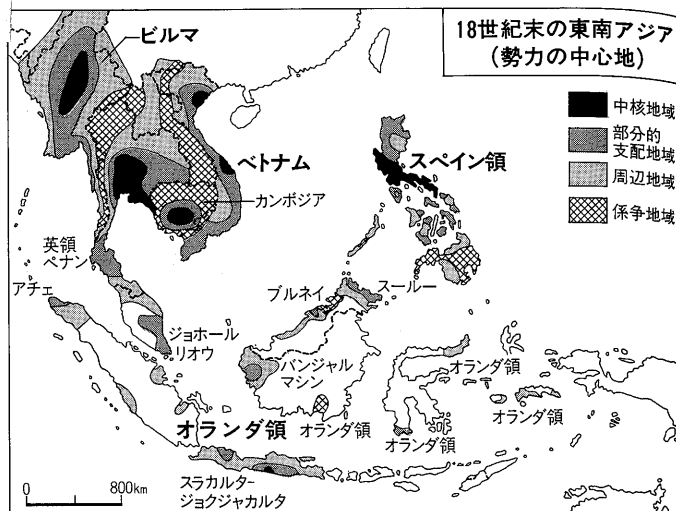
社会組織に埋め込まれていた。その意味で、王が国を建て、大王が王たちに号令をかけるといっても、ここである「国」は支配の機構、装置としての近代国家とはまったく別物だった。東南アジアにおいては近代国家は十九世紀、外から、また上から、異物として移植された。それが歴史的にどういう意味をもったか、これについてはあらためて述べる。とりあえずここで確認しておくべきことは、十九世紀はじめ、ラッフルズがマラ

「大王」として「王」たちに号令を掛けるようになると、このとき「帝国」が成立した。東南アジア史の泰斗、オリヴァー・ウォルタースは、こうした東南アジアに固有の政治システムを「まんだら」システムと呼ぶ。まんだらとは「王たちの輪」の意味である。

この政治システムは、われわれのいう国家（近代国家）とはおよそ別のしろものだった。「王」「国」「大王」「帝国」といっぺん括弧に括り、政治システムなどをもって回った言い方をするのも、それ以外にわれわれが通念としてもっている国家とこれが別物であるということを示すうまい方法が思いつかないからである。

ではどう別物だったのか。第一に、近代国家は国境によって定義される。これに対し、まんだらシステムは中心によって定義された。大王は比喩的に言えば磁石のような存在だった。大王から磁力が投射され、かれを中心に磁場が形成される。磁場にはひとつの秩序がある。それと同じように大王を中心に各地の王たちのあいだにひとつの秩序が構成される。これが「まんだら」である。したがって、まんだらシステムに国境はなく、もちろん内政と外交の区別もなかった。まんだらは大王から投射される「力」が強ければ拡大し、弱ければ収縮する、そして大王の「力」が消滅すればまんだらは崩壊する。

第二に、まんだらシステムを支える大王と王、王と家臣の関係は、親族、婚姻関係などの



ジョンなどである。これによって東南アジア各地に第一次産品輸出経済が形成され、これがさらに拡がってリヴァイアサンを財政的に支えることになった。

十九世紀後半、東南アジアにおこったもうひとつの大きな変化、それは複合社会の形成とそこにおける白人社会の成長だった。同じリヴァイアサンの統治下、言語、文化、宗教、思想、習慣などにおいてそれぞれに異なるさまざまなコミュニティが、並存すれども交わらず、市場で出会うほか、いかなる共通の社会意志も持たない社会、そういう複合社会の形成についてはすでに述べた。東南アジアではこの複合社会はどこでも人種原理によってヒエラルキー的に編成された。白人が頂点、原住民が底辺を占めて、そのあいだに中国人、アラブ人、インド人などの「東洋外国人」が位置した。(日本人は十九世紀には「東洋外国人」に属したが、二十世紀には「名誉白人」に昇格した。)そのなかで十九世紀後半、一八六九年のスエズ運河開通の頃から白人社会が成長した。かつては白人の男ばかりがやって来たところに、この頃から白人の女も到来するようになり、そうした人々がペナン、シンガポール、バタヴィアのような都市で、あるいは東スマトラ、ジョホールなどのプランテーションで、イギリス人、オランダ人中産階級の家を営むようになった。しかし、か

左の二つの地図は、18世紀末にはまだ生まれていなかったリヴァイアサンが19世紀末には十分成長したことを示している。

白石 隆 (しらいし・たかし)

1950年(昭和25年)、愛媛県に生まれる。
東京大学教養学部教養学科卒業。コーネル
大学Ph.D.、東京大学教養学部助教授、コ
ーネル大学教授を経て、1996年より京都大
学東南アジア研究センター教授。

主著『An Age in Motion』(Cornell University Press, 1990
年、大平正芳記念賞受賞)
『インドネシア国家と政治』(リプロポート、1991年、
サントリー学芸賞受賞、新版、NTT出版、1996年)
『スカルノとスハルト』(岩波書店、1997年)
『崩壊』(NTT出版、1999年)

海の帝国

中公新書 1551

©2000年

2000年9月15日印刷

2000年9月25日発行

著者 白石 隆

発行者 中村 仁

本文印刷 三晃印刷
カバー印刷 大熊整美堂
製本 小泉製本

発行所 中央公論新社

〒104-8320

東京都中央区京橋 2-8-7

電話 販売部 03-3563-1431

編集部 03-3563-3666

振替 00120-5-104508

◇定価はカバーに表示してあ
ります。

◇落丁本・乱丁本はお手数で
すが小社販売部宛にお送り
ください。送料小社負担に
てお取り替えいたします。

Printed in Japan

ISBN4-12-101551-7 C1231

「海のアジア」の定義については、濱下武志「序 地域研究とアジア」(『アジアから考える(2) 地域システム』東京大学出版会、所収)、中国の歴史については、市古宙三『世界の歴史20 中国の近代』(河出書房新社、一九九〇年)による。また日本については、中村隆英『昭和史I 一九二六—一九四五』(東洋経済新報社、一九九三年)によるところが大きい。

しかし、東南アジアは決して孤立した世界ではない。東西両世界を結ぶ地政的な位置にある東南アジアは古代から現在まで、外の文明との関係を通じて、また内部のネットワークを通じてその歴史を作ってきた。外の世界が東南アジアをどのように見たかは、東南アジア自身の認識と同様に東南アジアの全体のネットワークの理解に重要である。それは決して、歴史の自立的な発展と矛盾するものではない。

かつて我が国には、藤田豊八に始まる南海交渉史というジャンルがあり、精緻な史料批判を含む大量の論文業績があった。しかし、戦後のナショナリズムを基調とする東南アジア史研究の中で、その努力の多くは忘れられた。中国人が同時代の東南アジアをどのように見たか、そしてそれが戦後、いちじるしく発展した考古学調査とどのように接合し、どのように矛盾するのか、またその後の時代にどのように連続するのかは改めて検討すべき課題である。とくに近年強調されるネットワークの形成としての地域史の見解から、中国人のみた東南アジア像は再検討の必要がある。本巻の編者であった故山本達郎博士は、南海交渉史の業績のどの部分が捨てられ、どの部分がなお評価されるかの総括を主張されていた。

一 漢代の東南アジアのネットワーク(図①)

1 海の道の開始

南越国 華北に集中する中国都市市場から、西南中国を通じて東南アジアにいたる中国商人の道がいつごろに始まったかは明らかでない。前三世紀の秦の始皇帝の軍隊は番禺(広州近郊)に進出し、桂林、南海、象の三郡を設置した。桂林郡は広西省、南海郡は広東省にあたる。象郡は諸論があるが、筆者は紅河デルタと考えている(文献②二一四頁)。



図1 漢代の東南アジアネットワーク。

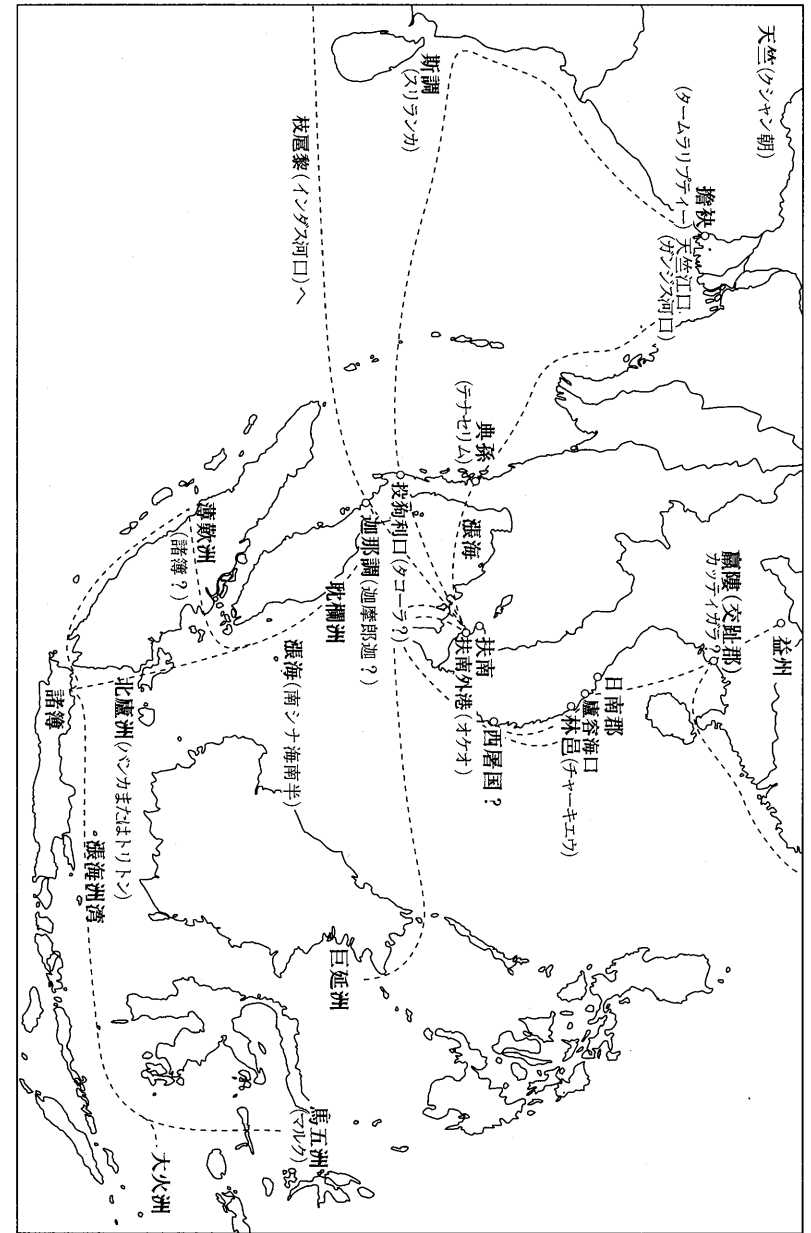


図2-1 六朝前期のネットワーク。

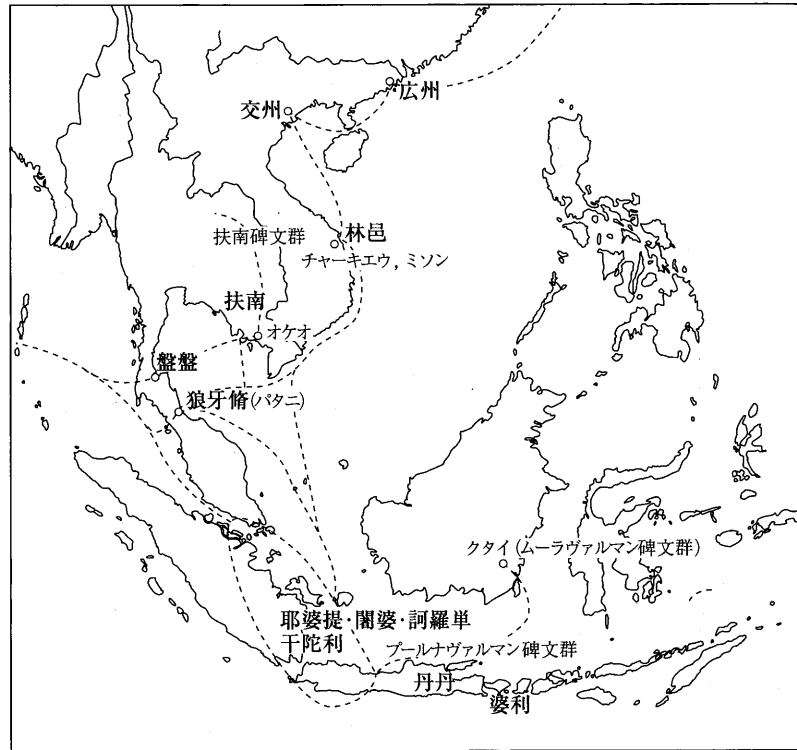


図2-2 六朝後期のネットワーク。

権を華南から紅河デルタ、タインホアにかけて建設する。

士燮政権の政治中心は、紅河デルタの中央、羸婁にあってと伝えられる。羸婁の伝承地ではドンソン文化と深い関係をもつ都城遺跡の存在が確認されている。羸婁は南中国から北部湾に入り、紅河デルタ中央に入るメインの水路ドゥオン河の南岸に位置する。呉への献物には真珠、玳瑁、象牙、犀角などの南海の産物がリストされている。

士燮の行列には随行する胡人(インド人)が香を焚いたという。呉に馬を貢献するなど、紅河ルートとも関係があり、また、益州郡(東雲南)の土豪を呉側につかせている。プトレミーには二世紀ごろのシナイ(中国)の港としてカッティガラ Kattigara の名がある。

歩頭路 (1)のルートを歩頭路という。南北朝期には昆明盆地に爨氏、大理盆地の張氏がそれぞれ自立的な政権を作っていたが、五九七年、隋文帝は史万歳を派して、大理、昆明の両盆地を制覇し、ついで唐高祖は雲南東北の曲靖に南寧州をおき、雲南経略をすすめていった。天宝年間(七四二―七五五)に歩頭路の開通がいそがれた。歩頭路は昆明の南から紅河沿いの歩頭(建水?)に出、水路、紅河を下って安南都護府に出るルートである(『蛮書』)。紅河ルート(歩頭路)によって、ハノイがインドにまで結びつき、南詔が四川をインドに結びつけた。

南詔 (2)のルートは唐の強力な統制下に生まれたものであるが、同時にそれは在地の勢力を刺激し、政治化させた。七世紀の唐朝の強力な雲南政策により、張政権が衰微した大理盆地では、八世紀になると、南詔の皮羅閣が勃興し、七三八年には吐蕃軍との戦いの功により、雲南王に任じられ、七三九年には大和城に都城を建設する。南詔は、ついで爨氏の反乱を利用して昆明盆地に進出し、七五〇年にはついに唐から離反して、独立国を形成する(本巻第5章)。唐の雲南への苛斂誅求への反抗とされる『南詔德化碑文』が、同時に発展する紅河ルート、ビルマルートの奪い合いでもあったろう(『文献』⑩)。

驛 (3)の大理からサルウィン、イラワジを下るルートを把握するのは驛の諸都市である(本巻第7章)。ピューの中心都市は当時、シュリークシェートラと呼ばれ、インド方面との海路交易のターミナルであったことが、玄奘や義浄の報告にある(本巻第7章参照)。

弥臣 (4)について『蛮書』では、永昌の北七四日に、驛・弥臣両国と接する小婆羅門国がある。プロームからアラカン山脈の南部を越してアラカン方面に出るルートを指している。八世紀のアラカンにはヴェッサリ王都に、ベンガルの影響とドゥヴァーラヴァティー、オケオの文化の影響をうけた仏教文化の遺物が多く発見されている(『文献』④二八〇―二八五頁)。アラカンからは陸路か海路でベンガル諸港に出たのだろう。小婆羅門はアラカンと考えられる。弥臣



図3 唐代のネットワーク。

現地の政治権力を温存し、それを利用して間接的に支配することを主体としていたことがあげられる。したがって爨氏に対しても、表だって反抗してこないかぎりは懐柔する方針であったり、州刺史や都督などの肩書きを与えている。雲南東北から滇池地区方面へのルートを開発して、そこに直接進出の拠点を設けることは、その地を掌握する爨氏を刺激することになり、この方針にはそぐわなかった。そこで唐朝は西側のルートから雲南に入り、爨氏の影響の薄い洱海地区の住民を手なずけることによって雲南地方への影響力の浸透をはかったのである。

第二に、梁建方の遠征に先立ってなされた嵩州都督劉伯英の上疏にも明言されているように『新唐書』南蛮伝、唐初の雲南進出は「西洱河天竺道」、つまり洱海地区からインドへ至るルートの開通をも念頭に置いたものであった。そうである以上、南側の出口を交州方面に持つ戎州路よりも、古くからビルマ・インド方面に接続している嵩州路が選択されるのは必然であったといえる。

第三に、中国全土を見た場合、南北交通の重心が次第に中国東部に移動しつつあったこととの関係が考えられる。戎州から雲南東部を経て交州に出るルート、あるいは貴州を経て広西・広東に出るルートは、戦時に上流から下流へ移動するならともかく、平時に物資を下流から上流へ輸送するために用いるには、積載量・安定性の点で難があった。長江下流域の本格的な経済発展はもう少し時代を下るにしても、黄河流域と長江下流域をむすぶ大運河はすでに隋代に開通しており、その中原王朝にとっての重要性が高まれば高まるほど、戎州から雲南東部を経て交州に至るルートの地位は相対的に低下せざるをえなかった。

さらに、七世紀後半にはいると、チベットの吐蕃王朝^{とふばん}の急速な勃興により、唐王朝の西部に軍事的緊張が高まる「文獻⑩」。吐蕃は西北の河西方面だけではなく四川西部・雲南西北部にも勢力を伸ばしてきており、これに対抗するためにも唐朝は嵩州―姚州ラインの軍事力を強化せざるをえなかった。七世紀末、則天武后の時代に維持・経営の困

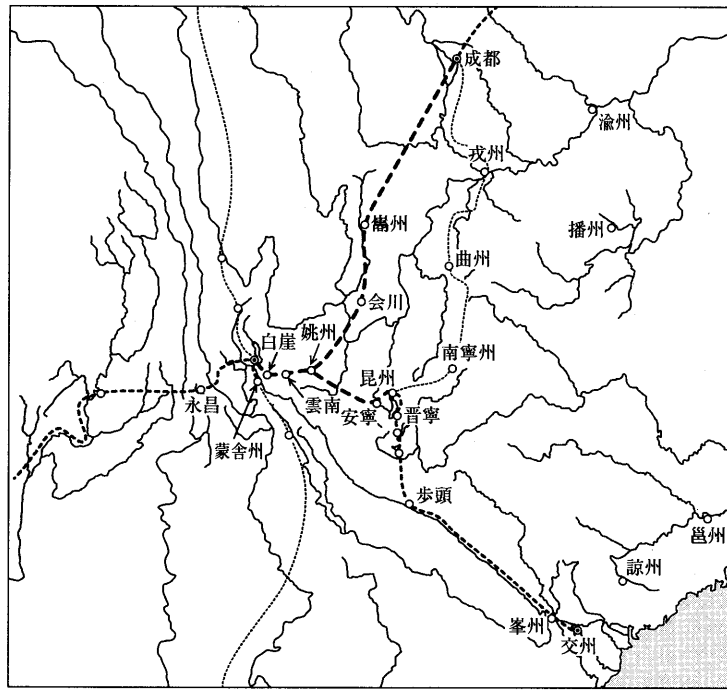


図2 7世紀(唐代前半期).

難さから姚州廃止論が出されたこともあったが、採用されなかった。景雲元年(710)年、姚州周辺の住民を軍事制圧しようとした李知古が吐蕃の援助を受けた現地民に殺され、嵩州―姚州が通行不能になるという事態が発生した。その後、約一〇年を経た開元十七(729)年、成都に劍南節度使が設置され、西南中国の支配体制は完全に軍事支配に置きかわる。設立当初五〇〇人の府兵によってまかなわれていた姚州の防衛が、玄宗の開元年間には二三〇〇人まで増強されているのも、まさにこれに対応するものである。

このようにして、嵩州―姚州ルートは中国内地と雲南を結ぶ幹線としての地位を固めていった。姚州は嵩州からのルートが東西に分岐して滇池地区と洱海地区に向かう地点であり、前線の最重要拠点となった。またその西側では、吐蕃の勃興によって重要性の高まっ